

吉井勇「蓮月」の成立と上演

——「日本橋」「売色鴨南蛮」の引用に触れて——

市川祥子

はじめに

吉井勇の戯曲「蓮月」は、昭和一八年（一九四三）九月、帝国劇場で新生新派によつて上演された（脚本…川口松太郎、蓮月…花柳章太郎）。その時の原作「蓮月（四幕）」は「実朝（舞踊劇一幕）」「憶良（舞踊劇一幕）」とともに、同年一月一日、『戯曲蓮月』として大雅堂から出版されている。その「後記」には以下のようにある。

私が今度書いた戯曲「蓮月」は、もともと溝口健二君の委嘱に
応じて、映画の原作として書いたものであるから、舞台劇として
は、時間的に云つてもあまり長く、むしろ一篇の物語と云つた方
が適してゐるかも知れない。しかし形式から云つても、私の意図
してゐるところから云つても、結局は伝記的な長篇戯曲なのであ
つて、若し時間に於て許されるならば、このまま上演したとして
も、一種の情緒のある舞台を表現したであらうと信じてゐる。

すべてを川口松太郎君の脚色に委ねるやうな事になつた。舞台
に精通した川口君のことであるから、約三分の一位に短縮したに
も関はず、よく私の戯曲の真髓を伝へた名脚色であつたことは

云ふまでもない。

それだからこの勤皇精神の深い巾幗歌人を戯曲化することは、私
に取つては近來にない興味の深い仕事であつて、去年の十二月か
ら今年の五月まで、およそ半年の間といふものは、この「蓮月」
の創作にばかり没頭してゐた。筆を進めてゆくに従つて私には、
梁川星巖の「満朝簪纓貴、不及一老尼」といふ詩が、唯の讃辞で
はないといふことが、だんだんはつきりと感ぜられて来た。

執筆を始めた昭和一七年（一九四二）一二月という時期、「勤皇精
神の深い巾幗歌人」はいかにも望まれる素材である。太田垣誠子、後
の蓮月は寛政三年（一七九二）生、明治八年（一八七五）没。幕末の
勤王の志士、安政の大獄に関わる人物と交流のあつたことで知られ
る。京都の知恩院、岡崎、西賀茂などに住み、歌はもちろん、書と、
簡素な焼き物に釘状のもので自身の歌を彫り込んだ器、蓮月焼で名高
い。歌集に『海人の刈藻』（明3）。青年期の富岡鉄斎を養育し、影響
を与えたことでも知られ、吉井の師、与謝野鉄幹の父礼巖、兄和田大
円とも親交が深い。歌と陶器作りによつて激動の幕末を生き果せた彼
女は、同じ激動の時代に、同じく京都にいる吉井にとっては大きな関
心の的であつたらう。

本稿では、こうした「蓮月」の成立、上演、出版の事情について、主に京都府立京都市学・歴史館蔵「吉井勇資料」内の吉井勇宛書簡を用いて明らかにしたい。書簡の発信者は川端康成、花柳章太郎、川口松太郎である。また、日本近代文学館蔵「大賀渡収集吉井勇コレクション」内の大賀渡宛吉井勇書簡も適宜用いたい。

「蓮月」には終盤に、昭和一四年（一九三九）九月に没した泉鏡花の作品が明示的に引用されていると考えられる。この点と成立の事情との関係にも論を及ぼしたい。

なお、本稿では、書簡からの引用は『』を用いて示し、判読不能の字は□とした。資料名は、書状、封書、葉書、絵葉書の区別を付けず書簡に統一した。

1

『戯曲蓮月』（昭18・11）「後記」（以降「後記」と記す）によれば、蓮月の戯曲は昭和一七年一二月に、溝口健二の委嘱により映画の脚本として書き始められた。

溝口健二演出作品は依田義賢脚本「お能もの」の予定であったが種々の事情でこれは中止になるらしく、新たに、吉井勇書卸しの「蓮月物語」か、大化の改新を描く「国土建立」が、候補にのぼりはじめた。

（「撮影所通信」「京都 二月十九日現在」「松竹撮影所」）

これによれば昭和一八年二月には蓮月の映画が候補に上っている。また、「大賀渡宛吉井勇書簡（昭18・4・22）」には『もう両三日で「蓮月」の映画の原作脚本を書き上げますから』とあり、「蓮月」の完成は、四月二二日に数日後を期していたことがわかる。「後記」に

「今年の五月まで」創作に没頭したとある通りである。「満朝簪纓貴、不及一老尼」と言われる蓮月の生き方、在り方自体を描くとすれば「伝記的な長篇戯曲」となる。作者は、場面を変えやすく長い年月を扱いやすい映画でこそ生きる素材と考えていたのであろう。

しかし溝口監督の映画「蓮月」はない。田中眞澄編「溝口健二年譜」^③には以下のようにある。

吉井勇書下しの『蓮月物語』、大化の改新を描く『国土建立』といった企画を検討するうち、軍報道部や支那派遣軍の肝煎で、日中提携映画を製作することになり、7月原作を書く作家の富沢有為男、牧野吉晴に米田治（企画）、依田義賢等と上海行。（略）原作となる小説『甦へる山河』は書かれたが、映画は12月に無期延期と決り、軍属をとかれる。（1943（昭和18年））

溝口は七月には日中提携映画の準備で上海に渡っており、「蓮月」の企画はそれ以前に消滅していたと考えられる。それぞれ吉井宛の、川端康成の五月五日の書簡（後掲）には『お原稿は松竹の方へお廻しになるのがお急ぎでございませうから』とあるので、五月はじめには映画が現実味を持っていたのであろうが、川口松太郎の七月一八日の書簡（後掲、新生新派の上演脚本について）には映画化への言及はない。

一方、花柳章太郎の五月一二日の書簡（後掲）には、吉井から「蓮月」脱稿を伝えられたのに応じて『八雲のゲラ刷り出来ましたら』とある。「八雲」^④は川端が編集代表を務めた小山書店の雑誌であり、「蓮月」はそれへの掲載も予定されていたことがわかる。「吉井勇宛川端康成書簡（昭18・3・11）」には以下のようにある。

『先日突然失礼致しました。御承諾を得ましてこの上なく有難く、念願の叶った喜びで帰東致しました。』

《御上京の機会に小山書店の方よりもお願い致したい由で、里見氏久保田氏等と共に小山にもお会ひ下されば幸ひに存じます。》

「吉井勇宛川端康成書簡」(昭18・3・20)には《戯曲是非御無理御聞き届けいただきたく存じます》、「吉井勇宛川端康成書簡」(昭18・4・1)には《戯曲は五月中でも御待ちいたしますお出来になるまでお待ちいたします》とあり、続いて「吉井勇宛川端康成書簡」(昭18・5・5)には以下のようにある。

《先日はお手紙有難く存じました。早速小山書店の方へも伝へ、喜びの余り電報などでお騒がせして申訳ございませんでした。一号の真船氏のも二号の久保田氏のも戯曲は長く、二百枚くらゐでも楽に入りますので、その点はお心づかひ無き様にと小山の方でも申して居ります。お原稿は松竹の方へお廻しになるのがお急ぎでございませうから、こちらで筆写させていただきます。》

そして「吉井勇宛川端康成書簡」(昭18・5・21)には《只今玉稿拝受いたしました。有難く存じました》とある。三月はじめ、川端は吉井に「八雲」への寄稿を依頼し、追つて戯曲提供の意向が伝えられ、五月には脱稿が知らされて、二二日に原稿が届いた。書簡に作品名はないが、花柳の書簡を参照すれば、戯曲であること、脱稿の時期、「八雲」への言及の点から「蓮月」を指すのは明らかで、二二日に届いた原稿は、筆写の後、溝口の所属する松竹映画に回されたはずである。

しかし「蓮月」は「八雲」には載らなかつた。「吉井勇宛川端康成書簡」(昭18・6・25、速達)には以下のようにある。

《御心にしがひまして、岡倉天心を御待ち申上げましても、結構でございます。第二輯は多分お手もとに届いてゐる事と存じま

すが、この輯の出来まところ、出版会と種々交渉がありまして、小説戯曲篇の第三輯は、今月の終り近くに企画届を出すといふやうな話になりました。第三輯を秋に出したく、度々御督促申上げました後で、まことに申訳なく存じますが、》

《つまり、第一輯第二輯と番号を打ちましたため、定期刊行物かどうかといふ事が、文協以来の問題となつて居りまして、定期刊物ですと、雑誌部に廻されて、不許可といふ事になります。それで、一年一冊か二冊として、その間に随筆評論篇、或ひは詩歌篇を挟む方法がよからうと、当局の半ば好意的な申出であります。従つて三冊目は、評論篇とし、四冊目の創作篇は、その企画届を出す年末に校了にしておく事に致しました。右の次第で、十月頃頂戴出来ますと、この次の創作篇に少し無理して間に合ふと存じます。よろしく御願申上げます。》

「八雲」第一輯(昭17・8)、第二輯(昭18・6)は「小説戯曲篇」。第三輯も「小説戯曲篇」を予定したものの、六月になつて当局から、「小説戯曲篇」が続くと定期刊行物と見なされて不許可となる可能性が高いので、次号に「随筆評論篇」「詩歌篇」を挟んで回避すべきとの助言があつたとのこと。第二輯月報に載つた川端の「『八雲』編輯記 その二」には、「次の輯として、小説戯曲篇と、随筆評論篇とを、併行させて編輯してゐる。原稿も大分いただいたてゐる」とある。そうした状況を受けての助言であつたらう。

「八雲」はクォーターリーの形式をとつたが、これは戦時下の情況から日本の文学を護るといふ意気込みで企画したものであつた。

この『八雲』は第一回(昭和十七年八月二十五日発行、初版三万部)のもので三五六頁の全頁が創作という雑誌であつた。もちろん、こういう出版が当局のお眼鏡にかなはずもなく、用紙の配

給もほとんどなく、闇で買った仙花紙によってまかだったのである。
 (小山久二郎『ひとつの時代—小山書店私史—』¹⁾)

昭和一五年一二月に日本出版文化協会が創立され、一八年三月には日本出版会となる。同傾向の雑誌の統廃合は本格化し、新たな文芸雑誌を出すことは難しく、出版会に認められた図書とさざるを得ない。結局、第三輯(昭19・7)は「評論随筆篇」となった。

第三輯の企画変更を迫られたのが《この輯の出来ますころ、出版会と種と交渉がありまして》という第二輯発行の六月一日頃。二五日には吉井に「蓮月」の不掲載が知らされた。書簡に《岡倉天心を御待ち申上げまして》とあることから、吉井は「蓮月」を取り下げ、次の創作篇に天心を扱った作品を提案したものと推測される。すでに『百日草』(昭18・6)に「岡倉天心」を載せており、そこには十数年前のこととして「私は以前から岡倉天心といふ人が好きで、一度はこの天心を中心人物として、それに大観や春草を配し、日本美術院の初期の頃のことを、三幕物ぐらゐの戯曲に書いて見たいと思つたことがあつた」、²⁾「その著書『東洋の理想』の冒頭に於て『亜細亜は一なり』と、早くも喝破してゐるところなどから見て、現今のやうな時局下に於ては、最その戯曲化を必要とするやうな人物ではないだらうかと、いふやうなことも考へられた」とある。時局に相応しい人選であろう。一方、「蓮月」は上演後間もない一月に出版されている。ちなみに翌年の「吉井勇宛川端康成書簡(昭19・11・9)」には以下のようにある。

《八雲第三輯は京都を発ちます時終屋へ預けまして御送りするよう依頼して置きましたから或ひは御手もとに参つてゐるかと思存じます。》

《与謝野御夫妻北原白秋氏(両方御一緒でも一方だけでも)に就ての御随筆よろしく御願申上げます。第三輯の秋声論藤村論のや

うな評論風でなくとも結構でございます。御自由に御書きいただきます。》

《詩歌篇の方が先きに出るかと思存じます。これには是非御歌をいただきたく何首くらゐいただきまますかは編輯(書房の)の者から申上げると存じます。随筆の方の枚数は少し長く書いていただきたいと考へて居ります。》

川端はこの時期にも吉井に歌、随筆の寄稿を依頼しているが、「八雲」は第三輯で途絶え果たされなかった。こうした依頼は戦後の、「人間(鎌倉文庫)の短歌掲載に繋がって行くものだろう。

さて、これらの事情で「蓮月」は新生新派によって世に出ることになった。花柳の昭和一七年一二月一五日の書簡(後掲)には《久々にて新生新派の為め脚本おかき願ひたく存じます》とあり、早くから脚本執筆を働きかけていたことがわかるが、「吉井勇宛花柳章太郎書簡(昭18・2・8、速達)」には以下のようにある。

《実は先日溝口君次回作品のヨテイに蓮月の企劃があり先生が脚本として御脱稿と云ふことをほのかに知りまして溝口君の方で映画になるのでしたら、私の方でも芝居にさせていただきますと云ふことではあります。溝口君の方でおたのみ致したものを横あいからと云ふことではありません。溝口君には別に手紙をだしてみますが先生の方でおさしつかへなかつたら上演のおゆるしを願へますまいか》

また「吉井勇宛花柳章太郎書簡(昭18・4・2)」には《終日久振りにて先生と一緒にいろ／＼のおもしろい思ひをいたし久々敷入りました。又京都気分を味わつたこと嬉しかつたです。蓮月は何んとかしてヒットしたく考へ居ります》とある。四月の新生新派中座公演に向かう途中に、京都の吉井を訪ねたものだろう。花柳は、昭和一八年二月に蓮月映画化の噂を聞き、吉井に「私の方でも芝居に」と慌てて願ひ

出て、三月末には上演の話も出ていた。美貌の勤王歌人は、女形にとつて喉から手が出るほどの素材であったと考えられる。

「吉井勇宛花柳章太郎書簡」(昭18・5・12)には以下のようにある。

《蓮月御脱稿の吉報に接し一同欣然として楽屋で語りひました八雲のゲラ刷り出来ましたら内見いたしたく存じますが先生から編輯の方へ御申渡し下さる様御願ひ致します》

「八雲」については前に検討した。この時には映画化も、雑誌掲載も、新生新派の上演も視野に入っている。そして「花矢柳寛太郎書簡」(昭18・6・5)「(長崎・一力からの新生新派同人の寄せ書き)には、《長崎にて連中蓮月脱稿返礼会相催□》、《蓮月ありがとう存じました皆々よろこび居り升》、《蓮月尼早く食べさせていたゞきたいとおなかをへらして》とある。脱稿までの話題であることから、六月はじめには、上演は決定に至っていないと考えられる。

九月の公演の筋書には大江良太郎「蓮月」のことが載る。

三月二十五日―喜多村緑郎一門会の昼食に招かれて銀座のハゲ天に行く。今回は先生の新生新派加入、東劇出演に因んできた同志の顔が揃ひ談笑霽々のうちに満腹、早目に楽屋へ顔を出したら吉井勇氏が京都からの上京観劇とあつて、頭取部屋に見えてみた

『生霊』『幸福』によつて新派劇と舞台因縁の結ばれた作者は、花柳章太郎の駆け付け参加につれて、歌道精進にいそしむ余力を劇作再起の方にも割いてもらひたいと、膝を正して要請された。

が、それから三月たつた六月の末、関西公演の旅先にある花柳章太郎から、吉井さんの勤王歌人太田垣蓮月脱稿、上演権をいただいたとの吉報に接した。

かうした考へ方が三月の邂逅で期待のかたちをとり得た時、『蓮月』四幕十三場のプリントが届いたのである。場数を聞いただけで膨大な量を思はせられるかも知れないが、元々この作品は某映画会社の懇望により、シナリオの基本台本として書き下された戯曲なのである。

これによれば、吉井は三月末に新生新派の楽屋で喜多村、花柳に脚本を乞われ、大江は六月末に「蓮月」の脱稿と上演権の獲得を知らされた。前に見たように、六月二十五日までは「八雲」への掲載が想定されているので、その頓挫を受けて、新生新派での、近い時期の上演が決定したと考えるべきだろう。

さて、大江によれば、劇団に届いたのは「蓮月」四幕十三場のプリント。日数の無さから見て、「八雲」か松竹映画から回されたものと考えられる。一月の『戯曲蓮月』所収の「蓮月」も四幕十三場であり、五月に「八雲」に届いていた原稿は『戯曲蓮月』の本文と同様か、それに近い形であった可能性が高い。この点は吉井の執筆の意図と関連するので確認しておきたい。

新生新派の上演脚本は川口松太郎が担当した。「吉井勇宛川口松太郎書簡」(昭18・7・18)には以下のようにある。

《扱、蓮月の事ではありますが、仲々スケールが大きいので、上演もむづかしいので目下、しきりと工夫中です、花柳は後半だけをやるよと云ひ、あなたもそのおつもりだと聞きましたが、後半だけでは、エピソードばかりで、劇としての構成に乏しく、骨組が薄弱です、やつぱり、前半後半の好い所を取り、「筋」の面白さをねらつて置かぬと、ヒトリ好がりの、半端なものになると思ひます》

《映画のためにお書きになつたものゆえ、芝居として無理多き事

は已むを得ませぬ。目下、私が、いろ／＼考へて居りますが、劇化上演の方法を、私にお任せ下さいませ。演出は久保田先生へお願ひ申すとして、それまでの上演用台本の完成を、任して下さいませか。》

「後記」には川口に脚色を委ね「約三分の一位に短縮した」とあったが、原作の取捨選択の内には、《花柳は後半だけをやると云ひ、あなたもそのおつもりだと聞きました》という希望を、《後半だけでは、エピソードばかりで、劇としての構成に乏しく、骨組が薄弱です》という理由で退けたことも含まれていた。公演中の「吉井勇宛川口松太郎書簡(昭18・9)」には以下のようにある。

《前略、どうもいそがしいので手紙も出せなくつてすみません蓮月の事は大躰甲斐荘さんからおきゝと思ひますがあんな工合に、勝手なことをして、あなたにはすまんと思つてゐます、たゞ上演については、やつぱり、ある程度条件があるので、あんな事になりました、ゆるして下さい、たゞ、評判がよいのでみんな喜んでゐます、》

《芝居も割合に入りよく、今日の日曜は昼夜ウリ切り、いづれ又、後便にて知らせます》

また、吉井の反応については「大賀渡宛吉井勇書簡(昭18・8・31)」に《上京したいと思ひましたが、医者がやめるやうに云ひますので、今回は見合はせませす。「蓮月」も小生のものとは、大分変つてゐるらしいやうです。籠居して専念歌作をやつてゐます、」「大賀渡宛吉井勇書簡(昭18・9・23)」に《甚御手数ですが、「蓮月」の絵葉書が少々欲しいのですが、若し御手に入りましたら御送り下さいませんか》とある。脚本は望んだ形ではなかったが、それでも「蓮月」は無事上演され、好評で、喜ばしいことではあったのだろう。

2

帝国劇場での新生新派「蓮月」は九月一日初日。「一、蓮月 二幕六場」「吉井勇原作、久保田万太郎演出、甲斐荘楠音装置・衣装考証」。併演は「家族」「牡丹花」。平日は四時開演、日曜祭日は十一時と四時半開演で、一作の上演時間にはおのずと限度がある。筋書によれば場割は、上ノ巻(文化十二年秋の末) 第一場 京の祇園街、第二場 太田垣光古の家/下ノ巻(三十年後) 第一場 蓮月草庵の仕事場、第二場 蓮月草庵の奥座敷、第三場 元の仕事場、第四場 元の奥座敷。上ノ巻は、知恩院の寺侍太田垣光古が、娘蓮月の夫望古を、禁裏宮繕延引に憤る建白書を出し、門主に累を及ぼしたとして離縁。彼女が出家するまでである。祇園の茶屋で同志桑山源次郎とともに気炎を上げる夫望古を蓮月が呼び戻しに行き、彼らに付く舞妓菊葉とも言葉を交わす(第一場)。戻った家では、家康の菩提所たる知恩院の恩義を掲げる光古に対し、望古が君臣の筋目を悟らぬ幕府を批判し、皇道を強く訴える(第二場)。下ノ巻は、蓮月が勤王の志士を庇護する場面と、彼女によつて遊女が身受けされるまでである。岡崎の蓮月草庵を舞台に、歌に詠んだ桜餅屋が繁昌した、蓮月焼の土集めを後の鉄斎が手伝つたという有名な伝承を生かし(第一場)、梅田源次郎、春日潜庵、山田勘解由らの志士を匿まう庵に所司代の手が入ろうとする時の、蓮月の毅然とした態度を描く(第二場)。出家を求めてきた島原の遊女桜木が、桑山と菊葉の娘であることが明かされ、二人が蓮月の用意した金を携えて身受けのために戻るのを見送る。蓮月は「まごころの、清きをかみの宿りにて、あまくだります御代ぞめでたき」と詠み、丹精した光古、望古の土人形に話しかけて終わる(第三、四場)。望古をはじめとした、勤王の志士の主張に分量が割かれ、それを支える蓮月の芯の強い美しさが印象に残る。

「吉井勇資料」には「蓮月 二幕六場」「吉井勇原作 川口松太郎脚

色」の上演脚本がある。台詞等がペンの書き込みで変えられており、上演に用いた後に作者に渡されたものと推測できる。脚色要項には「蓮月の高潔簡素なる生活及び、生活即芸術の境地にて作歌作陶せる態度を描きて近代□性の教訓たらしめんとせり」とするのに先立って、「本篇は太田垣蓮月の史実によらず、蓮月の生活に浸透せる王朝精神を摘抉拡大して脚色せり」とあり、梗概には「蓮月が六十五才とされる安政年間、岡崎の草庵を勤王志士の休息所たらんとして京都所司代の疑ひを受け、梅田源次郎その他の同志を助け（略）最後には死せる光古、望古の像を作り『大君の御代ひらけ行くのを、目のあたりに見るまでは死なぬ』と云ひつゝ、力強く生きぬくを誓ひ、高らかに勤王歌を朗唱す」とある。勤王の強調は上演許可に欠かせないものであろう。ペンで加えられた台詞には、原作から取られてはいるものの、「吾々が攘夷を唱えるのは外に向つてばかりではない、皇化に服せざるものは、みんな夷敵だ、皇威を傷つけ国家の面目をふみにぢるものは、みんな敵だ、われ／＼の攘夷は尊皇を精神とする攘夷だ、皇室を、ないがしろにするのは、幕府であろうと用捨はせぬ、すなわち吾々は国の中の敵をまず討つのだ」もあり、観客の教化という志向は明確である。

一方、吉井の原作「蓮月」は、第一幕の初めに山国隊の太鼓を聞きつつ座る蓮月を見た後、彼女の若い日からのことに移る。京に戻る前、丹波亀岡の城中で姫君と琴を合わせ（第一場）、知恩院内の養家太田垣家で父光古から、夫望古が尊皇攘夷の建白書を企てていることへの危惧を聞き（第二場）、夫を迎えに行った祇園で琴の弟子でもある舞妓菊葉と心を通わせる（第三場）。祇園の茶屋、帰ってきた家では望古の尊皇、攘夷、現状への危機感が強く訴えられるが、光古の家を守る大義の前に離縁が決まり、蓮月は髪を下ろす（第四、五場）。第二幕では蓮月が三門の前で浪人（かつての夫の同志）に絡まれる舞妓ちか菊（菊葉の妹）を助け（第一場）、院内の真葛庵で、桜餅屋の伝承を入れつつ、最愛の父を失うまでを描く（第二場）。第三幕では

岡崎の蓮月の草庵を舞台に、蓮月焼の模造を蓮月が許した、届けられた毒入りはったい粉を盗賊が食べて死んだとの伝承を取り込む。鉄斎との尊皇をめぐる対話を置き（第一場）、庵に匿う天章、潜庵との遣り取りの中で、前者に「満朝簪纓貴、不及一老尼」とつぶやかせ（第一、二場）、前の浪人が庵に盗みに入り、蓮月は持てる全てを与えたが、男は振る舞ったはったい粉の毒で死んで見つかる（第三、四場）。第四幕では西賀茂神光院蓮月庵での村人との交流を描き（第一場）、出家を願って島原の廓を抜けてきた遊女桜木に対して、田舎へ帰って父母の下で働くべきだと論じて身受けの金を与え、彼女を見送って終わる（第二場）。

上演脚本は蓮月が父と夫の土人形を見つめるところで終わっていた。土人形は「蓮月」第三幕第四場にある挿話で、上演脚本はそれまでの部分を取捨し、第四幕第二場の遊女の身受けを残している。逆に「蓮月」第四幕第一場の蓮月庵での生活は削られた。ここでは彼女の日々が挿話を並べる形で描かれている。川口の七月一八日の書簡に《後半だけでは、エピソードばかりで、劇としての構成に乏しく、骨組が薄弱です》とあるのはこれを指すと考えられる。挿話は泉鏡花の「日本橋」（戯曲、大6・5）と「売色鴨南蛮」（大9・5）を想起させるもので、また、寺の小坊主の姉として盲目の娘が登場している。

「蓮月」の伝記については、村上素道編『蓮月尼全集（下）』（昭2・2）を参照したと考えられる。蓮月研究の決定版であり、吉井にも「蓮月尼全集の帙古うして色の落ちつき見るに飽かなく²⁷」がある。

「蓮月」第三幕第四場では、蓮月が父母の土人形を作っている。「父におかれて」と題する「たちちねの親の恋しきあまりにも墓にねをのみ泣き暮らしつつ」が知られるように、父母への思慕は蓮月を特徴づけるものである。『蓮月尼全集』「尼の内面生活」には、和田大円の話として「神光院時代は、父母の人形を捏り細工で製して、之を自作の鉢の中に安置し、而して毎夜白檀香湯を沸かし、先づ地藏尊（白い金属製）を灌沐申上げ。次に父母の像を灌沐されました、灌沐の間は地

歳尊の真言を誦してゐられました」とある。「蓮月」の挿話はこれに基づくと考えられる。同時に、肉親の人形を生きたもののように扱ふことは、「日本橋」での、葛木が姉の京人形を慕つてことを連想させる。

「蓮月」第四幕第一場では、盲目の娘が腕白な子どもたちにいじめられているところを蓮月が救う。子どもに囲まれた娘を救うことは、「日本橋」での、葛木がお千世を助ける場面を連想させる。続いて、川で溺れた子どもの供養に蓮月の寄進で地藏像ができ、蓮月地藏と呼ぶれていることが伝えられる。『蓮月尼全集』「尼の救済思想」には、「仁風集覽」を引いて、「齢七十に余りてなほ急須、茶碗、酒盃の類を造るを業として、其陶器に自詠の歌を記し、乞へる人に与ふ。素より恬淡無欲の本性にして、常に得る所の物を傾けてまどしき者に施せり。こたびの粥施行にも金六両余を差加へたるは実に篤志と謂つべし」とある。蓮月の慈善の伝承は他にも多い。「蓮月」の挿話はこれらに基づくと考えられる。同時に、像が蓮月地藏と呼ばれることは、「日本橋」での、葛木の姉が飴屋を助けて数珠を受け地藏和讃とともに去ること、助けられたお千世が葛木をお地藏様かと思うことを連想させる。また、蓮月は病気の子どもが待つとの知らせに、「折鶴を作つてやる約束がしてありますから」と応じ、忘れた折鶴を取りに使いが戻った際にも、「折鶴……」「へえ、蓮月様はうちの娘に、その折鶴をやるつて約束をなすつたんださうで……」と部屋を探させ、再度注目させている。『蓮月尼全集』「茂助の懺悔談」には、「これは有合せ物ばかりで甚だ失礼だが、何うか持つて帰り薬うけにでもしてやつておくれ」と、病気の子どもに薬、菓子や砂糖を与えたことがある。「蓮月」の挿話はこれに基づくと考えられる。同時に、折鶴を与えることは、「売色鴨南蛮」での、捕縛されて行くお千世が残される宗吉に、魂を授けるべく折鶴を飛ばす場面を連想させる。

第四幕第二場では、「その我儘と申しますのは、外のことでありませんが……おちか様、あたしをあなたの妹にして下さいませんか」「うれしうござんす。お姉様……」と、桜木が同じく蓮月を慕

うちか子に姉妹になることを望む。この挿話は、「日本橋」での、お孝とお千世の姿や、最後に清葉が娘に向かって言う「もう、おつかさんと云ふんぢやない、お前も苦勞をしておくれ。姐さんと云ふんぢよ。私はあらためて芸妓に成つた」との台詞を連想させる。

この二作であるのは、溝口に「日本橋」（昭4・2・1公開）と「折鶴お千」（原作「売色鴨南蛮」、昭10・1・20公開）があり、花柳に「日本橋」のお千世という当たり役があるためである。川口の書簡には『花柳は後半だけを』とあったが、花柳が第四幕に拘るのは当然であろう。前に、五月に「八雲」に送られた原稿と十一月に『戯曲蓮月』として出版された「蓮月」が、同様の本文であったと推測した。それならば、こうした鏡花作品の引用は、上演が決まった後に花柳にあてて入れられたのではなく、当初から組み込まれたものであつたはずである。

そして、第四幕第一場には盲目の娘が登場する。娘は琴を懸命に修業すると語り、蓮月に「わたしの忘れることの出来ない人に、そつくり生き写し」と言われている。彼女の琴の音が聞えて作品は終わる。

間。時雨の音。落葉。

やがて琴の音が聴こえて来る。（第一幕第一場、亀岡城中で蓮月がまだ誠子時代に、姫と合はせたものと同じ曲）

蓮月が何か考へながらしづかに出て来る。琴の音に気付き、懐かしさうに立ち留まる。

やがて座敷へ上がり、机の上に置いてあつた琴爪の函を取り上げてじつと見る。

落葉しきりに降り、琴の音猶つづく。極めて静かに幕。

第一幕で蓮月は亀岡城の姫君、琴の名手の婦人（実母とされるが蓮月はそれを知らず、別れに琴爪、爪函を譲られる）と、琴、三絃を合

わせているが、この最後はそれと呼応し、盲目の娘が、彼女が慕い続けた亡き実母と重ねられる。過去が蓮月を経て現在、未来に現れる、大きな時間の円環を感じさせる場面である。

吉井の戯曲にとって盲目の人物は特別な存在である。「午後三時」(明42・3)では、盲目の弟進が「だつて僕は何か怖い」、「(突然怯ゆる如く)あつ、冷たい手が又触りますよ」と、近づく父の死、自分の死を感じ取っている。「俳諧亭句楽の死」(大3・4)では、盲目の落語家小しんが、狂った句楽を評して「あいつの考へてゐることはみんな真実のことばかりだ。盲目にならねえ前には気が付かなかつたことも、かうやつて盲目になつてから考へて見ると、あいつ位真実のことを云つてゐたやつはありやしねえ」と、盲目になつて「いろいろ今まで見えなかつたものが見える」ことを語り、「小しんと馬馬」(大9・1)でも、小しんが「おれは目が見えなくなつてから、不思議にほんとのことがよく分つて仕方がねえんだ。人間ほんとのことが分る位寂しいことはありやしねえぜ」と述べている。この、見えないために逆に全てが見えてしまう人物の系譜に「蓮月」の娘も連なる。「俳諧亭句楽の死」では、句楽の死を知つた小しんが、盲目の新内語り蝶丸の歌を聴きながら思う存分泣きたいと言い、新内の内に幕が下りる。「蓮月」でも、盲目の娘の琴の内に蓮月が母を思い、自らの人生に思いを馳せて舞台が閉じる。同じ形であり、吉井はここで自身のモチーフを展開している。川口の書簡には、後半だけの上演の希望について《あなたもおつもりだと聞きました》とあつた。伝聞で不確実なもの、吉井が後半を望んだとすれば、盲目の娘が理由の一つと考えられる。公演時の川口の書簡に《あんな工合に、勝手なことをして、あなたにはすまんと思つてゐます》とあるのは、これを削つたことに對してもあつたらう。

3

「後記」には「梁川星巖の『満朝簪纓貴、不及一老尼』といふ詩が、唯の讚辞ではないといふことが、だんだんはつきりと感じられて来た」とあつた。星巖の詩は「三十一文字 孰其称色糸 満朝簪纓貴 不及一老尼」(「色」と「糸」で「絶」を表し絶妙好辞の意に取る)。「蓮月尼全集」「尼と天章和尚」では、『満朝の簪纓貴きも』朝廷に「パイの鍋公卿は、恐らく『一老尼に及ばず』。この一老尼の花あり実あるこの『三十一文字』には及ぶまい。と、天章、星巖の義憤は、凶らずも此処にその鋒銛を彰はしたのである」と説明されている。「蓮月」では、天章がこれを言い、鉄斎が「満朝の簪纓貴きも、一老尼に及ばず」と云つた天章和尚の詩の心が、やつと分るやうになつて来ました」とし、明治になつて蓮月を訪ねた潜庵が再びこれを彼女に贈つている。繰り返して現れる、「蓮月」のテーマと言えるものである。鉄斎は蓮月に以下のように伝えている。

あなたの持つていらつしやる高く清らかな美しい心は、今のやうな世の中では何よりも大事なものです。あなたはもつと自分の心を大事になさらないけません。

あなたがお国に尽くす道は、日本の女としての美しい心で、何処までもこの国を守つてゆくといふことにあるのではないのでせうか。わたくしはあなたのやうな方こそ、かういふ騒がしい時勢の波の中にあつて、いよいよ尊まれないと思ふのです。

川口の上演脚本は、天章、鉄斎を出さず、この詩と、こうした傑物からの蓮月の評価に触れていない。《勝手なこと》の一番はこれであつたらう。蓮月の在り方より勤王の強調が優先されたのである。

吉井の「蓮月」の段階で、すでに蓮月の夫の造形は實際を離れ、尊皇攘夷思想を持たされている。『蓮月尼全集』「誠子の結婚」「養子重二郎との死別」では、最初の夫は身持ち放埒により離縁、二度目の夫は病気で亡くなっているが、「蓮月」では、夫をその思想が容れられないための放蕩としている（再婚には触れていない）。もともとの蓮月への関心やこうした造形、前に見た岡倉天心への共感からは、吉井の時局への反応を見ることが出来る。彼に、戦争の正義を信じ、勝利を願う気持ちがあったことは言うまでもない。蓮月の夫に「近年吾国を侵さうと計つてゐる英吉利、魯西亜、亜米利加などと云ふ国々は、みんな世界の何分の一といふやうな領土を持つ大きな国許りであつて」、「吾々は断乎彼等夷狄をして、わが尊い皇土を一步たりとも踏ませてはなりません。皇土は吾々が血を以て守るべきです」と訴えさせる思いに嘘はあるまい。しかし、一方で、その父の「忝じけなくも知恩院の宮の門跡譜代を仰せ付かつてゐる太田垣家から、さういふ国の法を紊すやうな、横道者を出すといふことが、何よりもわしは心苦しい。上^{かみ}に対しては恐れ多いのぢや」、「望古のやうな国の掟に背く者は〈略〉この日本にも住んでゐてもらひたくないのぢや」という感覚も退けてはいない。勤王の志士でも、自重を唱え煮え切らない態度でいた男は、結局似非浪人、盗賊となつて命を落としている。どちらを採るものでもない。蓮月を取り上げるのは、彼女と、彼女を取り巻くそれぞれの人物を描くためであつて、思想の傀儡を活躍させて、上映、上演時に民衆の教化を担うためではない。

「蓮月」執筆以前から、吉井の蓮月への関心は高い。吉井は昭和一七年六月に盲腸周囲炎で京都大学附属病院に入院。手術の後が長引き退院は八月四日。九月二八日に再入院し、三〇日には早くから予定されていた二度目の手術をしている。六月の病は重く、「病床雑詠」(昭17・8)には「生死の境にありて思ふや何目には数百の羅利見えつつ」「生くる死ぬるいづれか知らず夜もすがらわれ見てありぬ修羅道のさま」がある。この時期の雑感を並べた『百日草』の終盤には「蓮

月尼の歌(一)」「(九月二十一日)」「(五)」「(九月二十五日)」が置かれている。生死の境の体験を振り返つた時、再度の手術を控えた時に蓮月を思ふのである。「後記」には以下のようにある。

実は私が蓮月に興味を持ったのは、かなり以前からのことであつて、既に溝口君から依頼を受けた時には、その歌の中から、弓矢取り太刀さげ佩きて来む世には君に仕ふる身と生れてむ常ならぬ世はうきものとみつ栗のひとつ残りてものをこそ思へたらちねの親の恋しきあまりにも墓にねのみを泣き暮らしつ手すさびにはかなきものを持ち出でてうるまの市に立つぞわびしき

願はくば後の蓮の花の上に曇らぬ月を見るよしもがな
等数首を選んで、それに依つてこの老尼の一生を伝記的に書いたものもあつたのである。

一生を伝記的にとされるのが「蓮月の歌(一)」「(五)」であり、少女期から武勇に優れたこと、養子に行つた先で早くに兄、母を失い夫とも離縁したこと、亡父を慕うこと、焼き物を作る生活のこと、死出の準備のことまでが追われている。『蓮月尼全集』を参照した内容と言えるが、以下が注目される。

徳川時代の末葉、勤王佐幕紛乱の巷であつた京洛の地に生ひ育つて、武芸に於いても人にすぐれ、女丈夫的であつた蓮月が、よく清節な生涯を過すことが出来たのは、幾多人生の不幸に出会つて、おのづから心が鍛練されてゐたためであつて、何時しか歌禪一如といつたやうな悟道の域に達してゐたのである。

(「蓮月の歌(二)」)

劍禪一如に倣つた歌禪一如の語によつて、蓮月の保ち得た、心の鍛

【図】『戯曲蓮月』口絵「蓮月鉄斎観月図 富岡鉄斎筆」



(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

練による清節な生涯、悟道の域を表している。戦時下にある歌人ならではの感慨であろう。この理解の上に「蓮月」は書かれている。

『戯曲蓮月』には「蓮月」に因む「蓮月鉄斎観月図 富岡鉄斎筆」(図)と「憶良」に因む「貧窮問答図 富岡鉄斎筆」の口絵が付く。「蓮月鉄斎観月図」は、蓮月庵の庭で蓮月、鉄斎らが歓談し、その上に月の照る情景である。賛には「明治七年葉月尽の日」「桂のそのの梧桐のかけにくまなき月をめてつゝも」とあり、蓮月の手で「の山にうかれくゝてかへるさをねやまておくる秋のよの月 八十四才蓮月」が書き込まれている。歌は、野山の散策に疲れて帰る道を月が照らす情景を詠んだ旧詠で(『海人の刈藻』に「野月」として入集)、短冊などにも使われる。「鉄斎遺墨」(昭19・3)には「蓮月も鉄斎も月を見てゐたりこの絵のなかにわれも入らまし」があり、この絵を詠んだものと考えられる。蓮月は、その名からも、辞世「ねがはくはのちの蓮の花のうへにくもらぬ月をみるよしもがな」からも、月への思慕によって特徴づけられる歌人である。吉井もまた、月の下にいる彼女を、その本来の姿と捉えていたものだろう。

ところで「花柳章太郎書簡」(昭17・12・15)には、吉井の病後と映画「歌行燈」(昭18・2・11公開)の撮影に触れて以下のように

ある。

『洛北日記拝読いたして居りますその後お躰はもうおよろしいやうで安心いたしました私目下泉先生の歌「明かりの絵」撮影中に御座います』

『御病気全快後の気持の澄んでいらつしやる間に鏡花追善月待ちの戯曲おまとめ願へますまいか』
『久々にて新生新派の為め脚本おかき願ひたく存じます』

「蓮月」は溝口の依頼で二二月に書き始められたが、その一五日には『鏡花追善』を掲げて脚本を願うこの書簡が届いている。ここには『洛北日記拝読いたして』とあるが、吉井に『洛北日記』という本はない。昭和一三年秋から一九年秋に京都北白川に住んだため「洛北日記」「洛北雑記」と題する日記、随筆、短歌は多いものの、数ヶ月に一度「短歌研究」(改造社)などに載ったそれらを読んできた報告とは取りづらい。ここでは、花柳が吉井の『洛北随筆』(昭15・4)を読んだと仮定したい。そこには「洛北日記」がある他に、「春琴抄其他」という新生新派における花柳の演技と覚悟への賛辞、「鏡花先生追憶」という鏡花との思い出が入るためである。

「春琴抄其他」では川口松太郎脚色「春琴抄」(昭15・1、新生新派、京都南座)について、かつての久保田万太郎脚色「鴉屋春琴」(昭10・8、新劇座、第一劇場)と比較して論じている。花柳評は絶賛に近く、これを読んだとすれば脚本を願うのも僭越とは言えまい。

さうはいふものの花柳の春琴は、大衆的な観客に観せるのは惜しいやうな出来で、「鴉屋春琴」の時よりもぐつといい。勿論脚本本に従つて、大衆層相手のかなり突っ込んだ芝居はしてゐるが、(略)それよりも一層深い、本質的なものを、かなりの確に掴んでゐる。数年見ない間の芸の進歩の著しさは、自然俳優としての

風格の大きさを増して、第一場で舞台の上に見れると間もなく私には、演技以上の力強いものが迫つて来るやうに感じられたのであつた。これはひとつには彼が今度、新生新派といふ一劇団を作り上げたといふ、気魄の現れだらうとも思ふけれど、いづれにしても私は、わが旧友花柳のために喜ぶべきことだと思つた。

そして「鏡花先生追憶」は、吉井が鏡花の訃報をラジオで聞いたこと、少年時代に貸本屋で鏡花作品と出会つたこと、紅葉祭での遺族への接し方を感じ入つたこと、震災後の三越の会で一緒だつたこと、番町の家で蕎麦をこ馳走になつたことの思い出を綴る。後半は「鏡花礼讃」(『新小説臨時増刊・天才泉鏡花』、大14・5)の歌を再び載せて注を加え、「以上謹んでわが鏡花先生を弔するの言葉に代へる」と結んでいる。長年の敬愛の伝わる文章である。花柳の書簡では、これらを読んだことと「歌行燈」撮影という話題に続けて、吉井に共有されるはずの思いとして、『鏡花追善』が書かれたと考えられる。

吉井にとつて鏡花は、「李長吉」(昭17・2)に「九月二日、秋天暗くして心鬱するまに、李長吉の詩集を取り出して読む、この詩は亡き泉鏡花氏の常によく読んで愛誦せるもの」として「うつし世に鏡花先生亡きことを寂しみつつも李長吉誦む」があるように、折に触れて思い起こすような存在であつた。「大賀渡宛吉井勇書簡」(昭18・7・22)にも、『急に思ひ立つて伊勢参宮に來ました。今日は桑名にゆき鏡花先生の「歌行燈」のあとをしのんでからかへらうとおもつてゐます』とある。「蓮月」に「日本橋」「売色鴨南蛮」を想起させる挿話が並べられる前提には、吉井の鏡花への敬愛がある。

蓮月の伝承には、亡き親の声を墓に聞こうとすること、人形に会えない人の姿を見ることなど、鏡花作品の人物と共通する要素が多い。「父母の人形つくりし蓮月の心おもへばやがて泣かれ來」があるように、人形の逸話は吉井にとつて印象深いものであつた。また、たとえ「売色鴨南蛮」では、神田明神の境内で死のうとした宗吉を助けた

お千が、「半分夢中で、それでも私が此処へ来たのは神仏のお助けです。秦さん、私が助けるんだと思つちやあ不可い。(略)……親御さんが影身に添つて居なさるんですよ。可ござんすか、分りましたか」と言つて月を指す。宗吉も「忘れはしない、半輪の五日の月が黒雲を下りるやうに、荘厳なる銀杏の枝に、梢さがりに掛つたのが、可憐い亡き母の乳房の輪線の面影した」と振り返る。月は母の面影を宿す。亡き母は月にいて見守り続けている。「折鶴お千」でも、二度の宗吉が死のうとする場面で、月、月光は印象的に使われていた。前に見たやうに、蓮月は月を慕つた歌人である。吉井は、蓮月の月への思いに、鏡花のそれと通じるものを見ていたのではないだろうか。

また、「蓮月」では島原の遊女が身受けされている。『蓮月尼全集』「尼とさくら木」には、「島原わちがひ屋の遊女桜木は、身分にも似ず優に雅やかなる者であつた。未だその履歴を審らにせないが、後には尼の跡をしたひて様をかへたらしい」とある。蓮月と島原の桜木や祇園の上田重子との間に、歌を通じた交流があつたことは各書に見られる伝承であるが、ここではそれに身受けが加えられている。

鏡花は苦界に沈んだ女性の苦悩を描いてきた作家である。「自分の体が借金に縛られてゐる」(蓮月)女性が解放され、真つ当な労働で生きようと旅立つ姿には、そうした女性たちと、それを描いてきた鏡花への共感を見ることができよう。花柳の書簡には『鏡花追善月待ちの戯曲おまとめ願へますまいか』とあつた。これ以前に両者の間で、鏡花を追善する月待ちを扱つた戯曲が話題となつていなければ、この書き振りににはならない。折しも『鏡花全集』(岩波書店)の刊行中。「巻二十」(『売色鴨南蛮』)は昭和一六年五月、そして、「巻二十六」(『日本橋』)は昭和一七年一〇月の発行である。花柳の書簡を待たずとも、予て鏡花追善を期していた吉井が、蓮月の戯曲を構想する際に、彼女と同じく月を慕い、溝口と縁の深い鏡花の作品をそこに組み込んで思いを籠めようとすることはなかつただろうか。

花柳が「蓮月」第四幕第一場の上演を望んだのは、自身の当たり役

に因むばかりでなく、それが鏡花を思い起こさせるためでもある。その「蓮月」の作者吉井にも、蓮月の生涯を描くことで鏡花の追善を果たすという思いは流れていたと考えられるのである。

注

- (1) 「映画旬報」第74号、昭18・3・1
 (2) 「大賀渡収集吉井勇コレクシオンNo.三九八〇六」この資料は「日本近代文学館」第119号(平3・1・1)の「館収蔵文庫・コレクシオン(43)」において、「大賀渡収集吉井勇コレクシオン」の解説の中で紹介されている。
 (3) 田中眞澄編「溝口健二年譜」、『溝口健二集成』所収、平3・9・1、キネマ旬報社
 (4) 編集は川端康成、島崎藤村、志賀直哉、里見弴、瀧井孝作、武田麟太郎。第一輯「小説戯曲篇」(昭17・8・25)、第二輯「小説戯曲篇」(昭18・6・15)、第三輯「評論隨筆篇」(昭19・7・15)。
 (5) 「吉井勇資料No.一一四」
 (6) 「吉井勇資料No.一一五」
 (7) 「吉井勇資料No.一一六」
 (8) 「吉井勇資料No.一四四」所蔵館データは発信年を不明とするが、「八雲」第二輯を印刷中との内容から昭和一八年と推定した。
 (9) 「吉井勇資料No.三七五」
 (10) 「吉井勇資料No.三〇」所蔵館データの「資料情報」には「出版事情についての説明。第二輯の刊行後、第三輯が出せないで、三冊目は評論編を挟んで、その後に小説戯曲編の第三輯を出すことになることを述べている」とある。また、吉井の日記の昭和一九年一月七日には「八雲」を読む」とある(細川光洋「吉井勇の戦中日記」『洛東日録』抄)〔国際関係・比較文化研究〕第19巻第1号、令2・9・30)による)。
 (11) 小山久二郎『ひとつの時代—小山書店私史—』、昭57・12・20、六興出版
 (12) 吉井勇『百日草』、昭18・6・5、桜井書店
 (13) 「吉井勇資料No.四五」所蔵館データの「資料情報」には「原稿

- (与謝野夫妻、北原白秋についての随筆)の依頼など」とある。
 (14) 「宝青庵朝夕」(「人間」第1巻第1号、昭21・1・1)、「形影居連吟」(「人間」第1巻第6号、昭21・6・1)、「瑠璃玳瑁」(「人間」第2巻第1号、昭22・1・1)がある。
 (15) 「吉井勇資料No.一五六」
 (16) 「吉井勇資料No.五二八」
 (17) 「吉井勇資料No.二二三」
 (18) 「吉井勇資料No.二九」新生新派同人の花柳章太郎、伊志井寛、柳永二郎、大矢次郎の寄せ書きである。
 (19) 「新生新派九月公演脚本解説 帝国劇場」、昭18・9・5、東京宝塚劇場 ただし、吉井の上京について「大賀渡宛吉井勇書簡(昭18・3・14)」(「大賀渡宛吉井勇コレクシオンNo.三九八〇三」)には「昨日着京」、「大賀渡宛吉井勇書簡(昭18・3・22)」(「No.三九八〇四」)には「昨日の朝無事帰洛」とある。
 (20) 「吉井勇資料No.三三三」
 (21) 「吉井勇資料No.一一三」所蔵館データは発信年月日を不明とするが、封筒ウラの差出に「東京市麹町区丸の内帝国劇場にて」とあること「蓮月」上演中という内容から昭和一九年九月と推定した。
 (22) 「大賀渡収集吉井勇コレクシオンNo.三九八一八」
 (23) 「大賀渡収集吉井勇コレクシオンNo.三九八二〇」
 (24) 「大賀渡宛吉井勇書簡(昭18・12・28)」(「大賀渡収集吉井勇コレクシオンNo.三九八二四」)には「蓮月」今度はその夫を主人公として大阪歌舞伎座でやります」とある。これは昭和一九年一月の、大阪歌舞伎座での「尊皇ごよみ」(脚本…郷田恵、大田垣古肥…阪東寿三郎、蓮月尼…中村富十郎)を指す。「吉井勇作『蓮月』に拠る郷田恵作 戯曲尊皇ごよみ 二幕五場」(「吉井勇資料No.二六九九」)は、その上演脚本で、本文をカーボン転写した松竹株式会社用の箋を二つ折にして閉じたもの。半紙二つ折の表紙を付け吉井の筆で題を記している。用箋部分の初めにペン書きで「吉井勇先生」とあり、上演に際して吉井に贈られたものと推測できる。
 (25) 「吉井勇資料No.二六八六」この資料の扉には「二幕六場」と刷られているが、ここでは意味を取って「二幕六場」として扱う。上演

の概要はこれに拠った。上演を伝える資料に「舞台物語蓮月」(二幕三場 原作吉井勇)〔戦線文庫〕第61号、昭18・11・1、興亜日本社、「吉井勇資料No.三三七三七」がある。そこで「幕末の勤王歌人蓮月尼を描いた、この芝居は、秋の帝国劇場で新生新派に依つて上演された」として舞台を写した文章では第一幕が二場、第二幕が一場であり、それが実際の場数であつたと考えられる。

(26) 村上素道編『蓮月尼全集(下)』(昭2・2・20、蓮月尼全集頒布会)以降の蓮月の評伝はこれを参照していると考えてよい。編者による伝記は伝説化していた逸話を調査し直したもので、典拠を明らかにし、親交のあつた人物に直接会つてゐる点で功績が大きい。

(27) 「蓮月抄」、『京洛史蹟歌』所収、昭19・2・20、大雅堂

(28) 「スバル」第3号、明42・3・1

(29) 「中央公論」第29巻第4号、大3・4・1

(30) 「人間」第2巻第1号、大9・1・1

(31) 『蓮月尼全集(下)』の口絵には「尼を歎美するの詩(星巖の原書、写・編者蔵)」として、この詩が載る。天章が蓮月を讃美した詩を星巖が彼女に贈り、鉄斎が模写して全集編者に与えたものとのこと。建仁寺の天章慈英は、勤王の志士に密議の場を提供し、その工作は明治政府成立の原動力となつたともされる。

(32) 吉井勇『霹靂』(昭18・1・5、一条書房)における入退院等の記述を根拠とした。

(33) 「短歌研究」昭17・8・1

(34) 蓮月の、烈婦としての武勇や勤王精神をではなく、生き方を評価するのは吉井に限らない。たとえば、吉井とも交流のあつた相馬御風の「蓮月とその時代」(『貞心と千代と蓮月』、昭5・2・20、春秋社)には、「勤王党視されてゐた」が、「しかし、蓮月の本当の心もちは、さうした差別境を超越した博い同胞愛に基いたものであつたことは前述の如くである。又それであつたればこそ、あのやうなわが国の歴史上空前の大変動期ともいふべき時代に、しかもその中心地であつた都に住みながらも、なほ且あのやうな静かな清い心を以て生活することが出来たのであつた」。「この時勢に対して無関心どころか寧ろ積極的な関心をもちながらも、而もあのやうな稀有

な清閑な生涯を送り得たところに、私は蓮月の本当のえらさがあるのだと思ふ。それであればこそ、当時動乱の渦中にあつた人々にさへも、蓮月の庵はありがたくも貴い、たましひの休息所として懷まれ慕はれたのであらう。そこにあの時代に於ける蓮月尼といふ一個の人物の存在の最大価値と意義があつた」とある。

(35) 「貧窮問答図」は、『清荒神清澄寺所蔵富岡鉄斎作品総目録』(昭58・11・15、清荒神清澄寺)に新収絵画「山上憶良貧窮問答歌図」として掲載されている。掲載の図には賛があるが、『戯曲蓮月』口絵では欠いている。

(36) 「鉄斎遺墨」、『玄冬』所収、昭19・3・30、創元社

(37) 「吉井勇資料No.一〇五」所蔵館データは発信年を不明とするが、「歌行燈」撮影中との内容から昭和一七年と推定した。

(38) 東宝、監督・成瀬巳喜男、喜多八・花柳章太郎、お三重・山田五十鈴。昭和一七年一月から撮影。

(39) 「短歌研究」に「洛北日記」(昭13・12)、「洛北雑記」(昭14・9)、「洛北雑記」(昭14・11)、「洛北日記」(昭15・6)、「洛北日記」(昭15・10)、「洛北日記」(昭16・2)、「俳句研究」に「洛北雑記」(昭14・4)、「洛北雑記」(昭15・7)などがある。

(40) 吉井勇『洛北随筆』、昭15・4・10、甲鳥書林「鏡花先生追憶」の初出は「短歌研究」第8巻第11号(昭14・11・1)。

(41) 「李長吉」、『わが歌日記』所収、昭17・2・10、甲鳥書林

(42) 「大賀渡収集吉井勇コレクションNo.三九八一六」

(43) 注(27)に同じ

※引用にあつては旧字を新字に改め、ルビを取捨した。吉井勇の引用は番町書房版『定本吉井勇全集』に、川端康成の引用は新潮社版『川端康成全集』に、泉鏡花の引用は岩波書店版『鏡花全集』に拠つた。

付記 本稿にあつては、京都府立京都学・歴史館、日本近代文学館に、資料閲覧の許可いただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、第71回泉鏡花研究会大会(令1・7・6、同志社大学)での研究発表(吉井勇「蓮月」と昭和一八年の花柳章太郎―「鏡花

追善月待ちの戯曲」―↓をもとにしています。会場内外で貴重なご意見をいただきましたことに感謝申し上げます。